

人生の

道しるべ

あなたの悩みに答えます

森本あんり

(国際基督教大学教授)

一九五六年、神奈川県生まれ。プリンストン神学大学院博士課程修了(D.H.D.)。著書に『反知性主義』『不寛容論』(いずれも新潮選書)など。

写真:遠藤 宏



相談 教会の世界に進むべきか

私は大学院で神学を専攻している、バイセクシュアルの男性です。将来は研究を続けながら、司祭の道も考えております。いきなり驚かせ

てしまうと思いましたが、限られた誌面で拙い悶々とした想いを吐露させていただくため、単刀直入に述べたほうが良いと考えました。昨今「多様性」がさまざまな分野で話題になっています。しかし、神

学の分野で多様性における「一致」に注目するとき、途端に、私は本音と建前にうんざりしてしまいます。こんな教会の世界にわざわざ踏み込まなくてもよいのではと悩みます。じつは、いちばん味方についてほしい所属教会の司祭は現在の指導教員でもあります。その方にカミングアウトするのも、あと一歩が出ません。私自身はキリスト教に救われた経験もあるので、悩みは逆説的・積極的な一面もち合わせているとも思います。けれど、これから先、神学をやる意味があるのか、教会の世界に進むことがいいのか揺らいでいます。青くさい吐露ではありませんが、よろしくお願いいたします。(東京都、二十六歳男性、大学院生)

回答 ANSWER

当コラム第二回のご相談は、前回と打って変わり、いきなりプライベートで深い実存の苦悶に満ちた内容です。

しかも、この国では少数派のキリスト教で司祭職を志望する神学の研究者、そのうえさらに性的マイノリティという、かなりニッチな領域です。担当者から送られてきたとき、本誌が取り上げて論じるべき質問かどうか、判断に迷いました。

しかし、ここまでご本人が単刀直入にご自身の事情を吐露してこられたからには、こちらも正面から向き合ってお答えするのが筋だろうと思います。

おそらく相談者は、こうした問題について回答者である私がこれまでどのような発言をしてきたか、ご存じなのでしょう。だからこそ、この機会にご自分の思いをぶつけて率直な反応を知りたい、ということなのだと思えます。

ご本人の問いに答える前に、キリスト教やセクシュアリティの問いに詳しくない一般読者のために、問題の背景をごく短く説明しておかねばなりません。

歴史的にキリスト教は、性に関して禁欲的なイメージが強いようです。カトリック聖職者の独身制や修道院などが知られているからでしょう。

しかし、聖書には肉体や性に関し

て積極的で肯定的な言葉もたくさんあります。人間は、心と身体をもつ全体が善きものとして創造されたからです。「汚れた肉体」と「清らかな精神」という二元論は、むしろヘブライ的な伝統が斥け続けたギリシア思想でした。

バイセクシュアルを含む同性愛についても、十分な理解が必要です。聖書には、同性間の性行為をはっきりと非難している言葉があります。

しかしそれは、すべての人が異性愛者だと考えられていた時代の言葉です。ある人にとっては異性でなく同性が自然な性愛の対象となること、そしてそれが意図的な選択の結果でないことなどは、二十世紀以降によりやく広まった知見で、聖書時

代には知られていませんでした。だから同性間の性愛は、異性愛者があえて求める倒錯的な行為だと考えられて忌避されたのです。

それに、同じ文脈で泥酔や虚言なども非難されているのに、それらには目をつぶって同性間性行為の禁忌だけを強調するのは、解釈としても偏っています。

しかし、こう説明しただけで現代の諸教会が抱えている矛盾や対立が解消するわけではありません。カトリックとプロテスタントでも受け止め方は異なりますし、同じプロテスタントでも教派ごとに、いえ個人ですら、解釈はさまざまです。

相談者は、建前では多様性を重んじる姿勢を示しながら、現実には閉

鎖的な教会の現状に辟易しておられ、今後の進路にも迷いが生じているようです。

問いが直球なので、私も直球でお答えします。

教会は、聖人の集まりではありません。本音と建前の不一致にうんざりするなんて、そんなヤワな精神なら、司祭職には就かないほうがよいでしょう。昔も今も、教会は矛盾だらけで、嘘ばかりで、ひと癖もふた癖もある人の集まりです。なぜなら、神がそういう人びとを呼び集めたからです。

健康な人に医者はいりません。要るのは病人です。司祭とは、自分も同じように病を抱えつつ、だからこそそういう人の心がわかって、それ

らの人と共に新しい道を模索しようと努める人のことです。それは、人間的にいつても真に尊い働きだと私は思います。

おそらくこれは、教会だけの話ではないでしょう。企業理念に共鳴し、憧れて入った会社。社会正義を実現すべく選んだ職務。世界平和に貢献すると信じて着手した研究。どんな道を選ぶにせよ、希望だけで仕事が進むわけではありません。

遅かれ早かれ、幻滅が訪れます。掲げた理念が高邁であればあるほど、裏切られる可能性も大きく、人に嘲られる可能性も高い。それでも、人を上へ上へと駆り立てるのは、そういう理想と現実とのギャップなのです。

本音と建前が一致している社会なんて、この世には存在しない、というのがキリスト教的な現実認識です。神学を研究するということは、いわば天と地のギャップをどのよう

に橋渡しするかを考えることです。これ以上ワクワクする学問など、私はほかに想像できません。

コロナ禍という嵐のなかで閉幕したオリンピックですが、競技の前や後に、世界で、母国で、不当な扱いを受けている人びとへの共感と連帯を示す選手の姿が目立ちました。

もし日本に仲間がいないと相談者が感じるなら、世界の諸教会に目を向けてみてください。同じ教派でも国や地域によって違いがあるので、思わぬ連帯を見つけることができます。

質問の文章を読む限り、相談者はご自分の思いをきちんと文章に表現して伝える高い能力をお持ちです。それを生かさないうえには、ぜひありません。教会の司祭職を志望するなんて、「正気の」人間の心に発したことではないでしょう。だから、与えられたその志を実現に至らせる力も、あなたにはきつと与えられると思います。



投稿要領

日常の相談事や悩みについて、400字詰め原稿用紙1枚程度で、住所、氏名、年齢、職業を記入のうえ(掲載は匿名)、ご送付ください。掲載分には、図書カードを進呈致します。原稿は、内容を損なわない範囲で、一部を修整させていただく場合がございます。原稿は返却できません。掲載分は電子メディアや出版物などで公開する場合がございます。あらかじめご了承ください。

宛先

〒135-8137 東京都江東区豊洲5-6-52 NBF豊洲キャナルフロント11階
株式会社PHP研究所 Voice編集部 人生相談係
メールでも投稿を受け付けております。

voice@php.co.jp